

# コスタリカ共和国大使館に聞く ～昭和・平成・令和の三時代にわたり日本を見守る～

昭和62（1987）年に初来日して以来、様々な形で日本とかわり、現在二度目の大使としてご活躍中の、中米・コスタリカのアレクサンダー・サラス・アラヤ大使閣下に、日本人の「働き方」や新型コロナの影響などについてお話を伺いました。

国際課

—— まず、日本との出会いについて教えてください。

国際協力事業団（JICA）の中小企業振興プログラムに参加するため、三五年前に初めて来日し、六か月間滞在しました。当時の日本は、車や家電に代表される「高品質」「ハイテク」のイメージと、侍や芸者など伝統文化のイメージの混在する不思議な国でした。鉄腕アトムやマジンガーZ（注：日本のロボットアニメ）もコスタリカで人気を博していました。飛行機の中でカセットテープを使って日本語を急いで学び、東京の街を歩き回りました。現金を銀行からいつでも引き出せるキャッシュカード、二四時間開いているコンビニ、自動化されたトイレなど先端技術に支えられたライフスタイルに感動しました。

その後、コスタリカの市長や国会議員などとして幾度も来日し、平成一七（二〇〇五）年から翌年にかけて一度目の大使を経験しました。大使を辞めた後も日本に残ることを決心し、貿易会社に勤務しましたが、平成二〇（二〇〇八）年のリーマンショックと円高で行き詰まりました。そこで、スペイン語の教師に転身し、高等学校の生徒やその親たちと交流しました。その後、コ

スタリカで再び政治家として活動し、令和元（二〇一九）年から現在まで、二度目の大使を務めています。

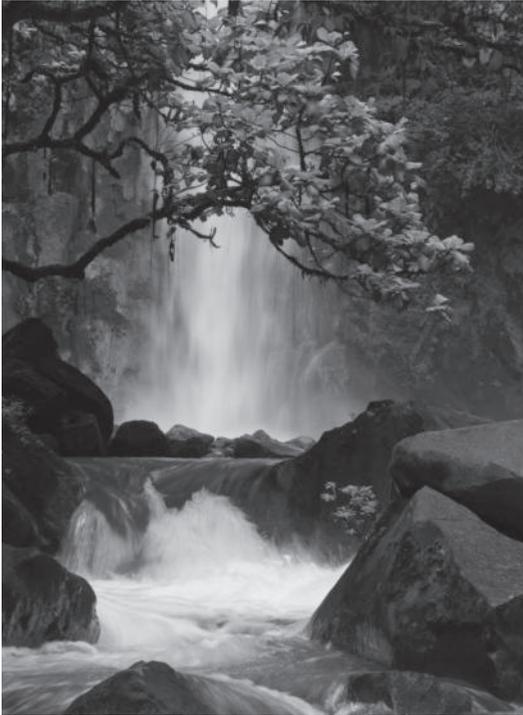
—— 三〇年以上の長きにわたり、多くの日本人と交流しておられますが、閣下の眼から見て、日本や日本人は変化したでしょうか。



コスタリカ共和国大使館提供

大きく変わったと思います。昭和時代の日本人は、行動や服装において保守的で、とても真面目でした。今の若い世代は、もっとリラックスしていて、社会の規範に従うのも緩やかですね。

昔の日本人は、自分の会社に強くコミットしていました。例えば、スペイン語を学ぶのは会社の要請でスペイン語圏で働かなければならないから。会社の要請を自分の運命と考え、それに生涯を賭けていました。現在、日本人がスペイン語を学ぶ動機は実に様々です。プロサッカーをもっと楽しみたいという人もいれば、ギターやダンスを習いたいという人、エコツーリズムのボランティアになりたいという人もいます。以前はビジネスという狭い分野でのみ外国に関心をもっていたのが、今では外国に対してもっと開放的になり、自分の色々な可能性を考えつつ、世界の多様な事柄に関心を抱いているという感じですね。



コスタリカ共和国大使館提供

—— 日本人の「働き方」についてどのように考えますか。

日本人は「時間」に対して強くコミットします。日本人の時間管理は厳格で、何時に始まり何時に終わるかということがとても重要です。日本にはまた、猛烈に働く伝統があり、労働文化の顕著な特徴となっています。しかし、こうした文化は時とともに変化していて、他国と同じように日本の社会も、個々人の暮らしにおいてより良き「均衡」を求める声に適応せざるを得なくなっていると思います。この「均衡」を

現するのは、私たちにとって常に難しいことです。しかし、先にスペイン語を学ぶ動機のところでも述べたように、今日の日本はグローバル化された社会であり、他の国々で起きていることをよく理解し、あるいは理解しようとする関心を一層深めています。

そうした事情を踏まえると、望ましくない労働慣行を避ける努力を続けるとともに、柔軟な時間管理について十分理解し、それを実行することが必要なのだと思います。

私の国について言えば、コスタリカ人は「仕事」に対して強くコミットします。例えば、このインタビューを準備してくれた同僚の総領事のように、強くコミットした仕事であれば、通常の勤務時間を超えて働くこともあるのです。私には正規の勤務時間を守る責任がありますが、超過勤務が必要な場合、通常であれば、私のチームの面々は喜んで超過勤務に応じます。これはもちろん、彼らの個人的な都合と相容れないのですが、私としては、彼らが柔軟な時間管理の下で働いてくれることにいつも感謝しています。

——日本では新型コロナウイルスの流行を契機としてテレワークが広がるなど、「働き方」に大きな変化が生じつつありますが、コスタリカではいかがですか。

コスタリカでも、公共部門、民間部門を問わず、働き手の安全を確保するため、テレワークやバーチャル会議が急速に普及しました。時々しか活用されていなかった技術的可能性が、新型コロナウイルスの流行によって、一気に開花し、定着したという感じです。

コスタリカでは、最近、テレワークと「母親と子ども」のメンタルヘルス問題についてよく議論になっています。ロックダウンによって学校が閉鎖され、オンライン授業に移行したのですが、親もテレワークで家庭にすることが多くなり、特に母親が子どもの世話に忙殺され、まるで「牢獄」にいるように感じてしまう、という問題です。

しかし、こうした状況が家庭内の「力学」を変化させることもあります。例えば、私の娘夫婦も当初そのような状況だったので、同じくテレワーク中の夫に子供を預け、買い物や仕事など、以前にも増して積極的に外出するようになりました。このように、テレワークの普及が家庭内の役割分担を見直す契機になることもあるのです。

コスタリカでは、テレワークの普及が国民生活に及ぼす影響は、全般的に良好と考えられています。現在、学校は再開されましたが、親が子供の勉学をサポートできるので、オンライン授業も並行して続けるのがよいと思います。大人にとっても、仕事と家庭生活をバランスよく保つには、テレワークと出社を共に行うのがよいと思います。

——ジェンダーバランスにとっても配慮した考え方だと思えますが、そもそもコスタリカでは、雇用分野のジェンダー平等はどうなっていますか。

コスタリカは、一九四〇年代から国民福祉の向上と経済成長に力を注ぎ、民主的、平和で安定的な国家を実現し、昨年（二〇二一年）は経済協力開発機構（OECD）に加盟しました。教育や医療、年金などの社会保障制度への普遍的アクセスも実現しています。このことから、女性の教育水準が大いに向上し、女性が色々な職種で働くようになりました。私の子供のころ（一九六〇年代）、女性の仕事と言えば、家事、教師、看護師、秘書など伝統的な分野に限られていましたが、今日では、医師、弁護



コスタリカ共和国大使館提供

士、エンジニア、企業の幹部職としても活躍するなど、男性とほとんど差はありません。

コスタリカの政党には、議会選挙に候補を立てる場合、男女同数にしなければならぬという規則があります。大統領選挙の候補者についても、大統領が男性なら副大統領は女性、大統領が女性なら副大統領は男性でなければなりません。また、官庁などの役員会、裁判所などについても、法的な規制はありませんが、社会的な圧力により男女バランスを考慮するのが当たり前になっています。

—— コスタリカの公務員について教えてください。公務員は若者に人気のある職業でしょうか。

教育や社会保障制度の整備に伴い、公共部門の雇用が特に一九七〇年代以降、急拡大しました。この時代、公務員は人気の職業だったと言えるでしょう。コスタリカの民間部門には、公共部門と同じような強い雇用保障がありますが、これもコスタリカで一九四〇年代から続く社会改革の一環です。

しかし、公共部門の様々な分野（教育、医療、司法など）において、労働組合などの諸団体がそれぞれ協約を結んだため、給与などの人事制度がばらばらになってしまいました。現在、これを統一し、バランスのとれた制度にするための法整備として「公務員雇用法」が策定され、国全体として検討中です。この法律が施行され、処遇の公平性などが確保されれば、若者に対する公務員の魅力を高めることにつながると思います。

—— 本日はお忙しい中、インタビューにご対応いただき、ありがとうございます。



## Profile

### アレクサンダー・サラス・アラヤ大使

国会議員、住宅省次官、駐ウルグアイ大使、駐日大使等を経て、令和元（2019）年12月から二度目の駐日特命全権大使を勤める。

## コスタリカ共和国（基礎データ）

- 1 位置：中米（パナマとニカラグアに挟まれる）
- 2 面積：約51,100平方キロメートル（九州と四国を合わせた面積）
- 3 人口：約509万人
- 4 言語：スペイン語